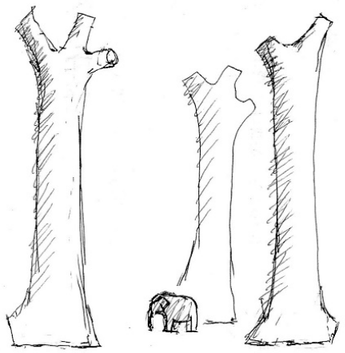
出品番号:NO. ２／作者:石上城行／タイトル:「記憶の景色　ー林の中の象ー」

今回、宝船展 2018 に出品した作品は、昨年の宝船展に展示したスケッチ「記憶の景色ー林の中の象ー」をもとにエスキースとして具体化したものである。

具体的な制作工程は、まず塑像用粘土で原型を作り、石膏取りの作業をへて石膏像に置き換える。次に表面をヤスリで整えることでカタチの精度を出して完成させている。作品は、抽象化した二つの木の間を象がゆっくりと歩む姿で構成されていて、何処かにあるようで何処にも無い景色が展開している。今回、展示した作品はあくまでもエスキースとして提示していて、実際は実物大のインド象のサイズをイメージしている。最終的にはブロンズ製の彫刻として、どこかの広場に設置したいと考えている。

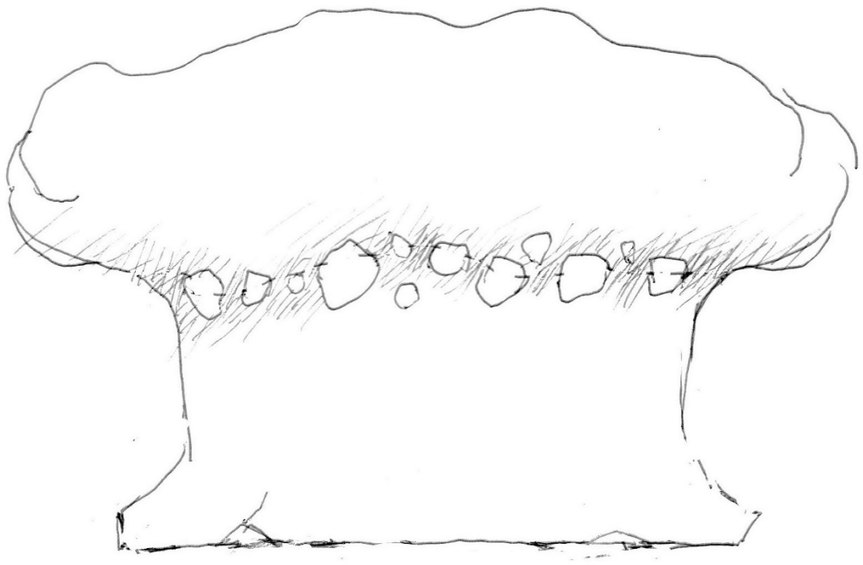


タイトルの「林の中の象」とは原始仏教のダンマパダの詩篇にある言葉で、出家者が修行に臨む際の覚悟を説いた言葉の一部である。本来の意味としては、厳しい決意を促す言葉だが、私としては少しやさしい感じでまとめることで、ニュアンスの間口を広げている。

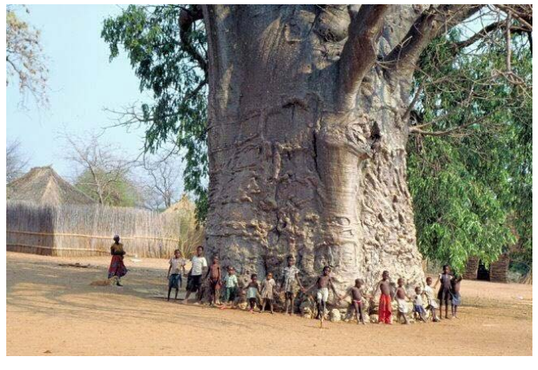
実際、今回の宝船展に参加したパフォーマーの方から私の作品の中でパフォーマンスしてみたいとの申し出があったと聞く。非常にうれしいかぎりであり、将来そのような企画が実現することを切に願う次第である。

最近、ここ数年の自身の作品を振り替えてみた。2006 年に「記憶の容（カタチ)」というタイトルで家型の彫刻を作ったときから「記憶の景色」「記憶の庭」「記憶の旅」などというタイトルを付しながら様々なカタチを作品世界に出現させてきた。いずれも記憶をテーマとするところが共通している。

私にとって記憶とは、常に忘却と更新をくりかえす人の心の営みであり、最も人間らしい特質の一つと考えている。これは、この世の理（ことわり）を、全て相互の関係に起因するものと考え、常に変化し、ひと時も留まることは無い、と規定した東洋哲学の思想を最もよく体現した事象ではないかと感じている。



今後は今年の宝船展のエントリーシートで示したように「樹」をテーマとした作品を夢想している。樹のもとに集う人々へ、ひと時の憩いをもたらすとともに、それぞれが自分自身と向き合う「時（とき)」を創出する「場」の醸成に寄与できるような、大らかな彫刻作品を創りたいと考えている。



画像　樹齢 2000 年の幸福の木：南アフリカ